

クラルテ運動の光と影

——雑誌『種蒔く人』の国家論／文学論

内藤 由直

一 未完の反戦運動

種蒔き社が発行した『種蒔く人』は、一九二一年二月に秋田で創刊された雑誌である。一時休刊し、発行地を東京へ移して再刊した後、度重なる発禁処分を受けながらも一九二四年一月まで刊行を続けた。^①

『種蒔く人』は、近代日本文学の歴史の中で重要な役割を果たした雑誌の一つであり、特に同時代のフランスで、アンリ・バルビュスを中心に実践されていた反戦活動であるクラルテ運動を日本へ導入したことで知られている。佐々木孝丸は、「もしバルビュスの『クラルテ』運動がなかったならば、そしてこれを日本に移植した小牧近江の努力がなかったならば『種蒔く人』の運動は起らなかったであらうし、従ってその後のプロレタリア芸術運動は違った道を歩んできただらう」と述べ、クラルテ運動が『種蒔く人』に及ぼした確然たる影響と、本雑誌が日本のプロレタリア芸術運動に与えた衝撃を強調している。

小牧近江は、「芸術家は、再び資本主義の道具となるやうな戦争を傍観してはならない。単なる精神主義の平和論者ではなくて、戦争と戦争するための、革命的な非戦論者になり切らなければならない」という考えのもと、同人たちとともに『種蒔く人』を創刊し、日本でクラル

テ運動を展開した。戦争と資本主義への抗戦を思想的核とする『種蒔く人』の運動は、反戦平和を希求する崇高な理念が高く評価されてきた。^④

一方で小牧は後年、『種蒔く人』の運動を振り返って、次のように述べている。

この頃になつて、よくクラルテ運動の話^②をせよといわれるが私はその都度ひやりとする。それは私も過去の歴史を語るような年輩になつたという寂しさではなしに、戦争に対してなんと不甲斐なさであつたか、ことに中国侵略に対して何をしたかということである。^③

ここには、反戦平和の実現を目標として掲げ、クラルテ運動を日本で実践した『種蒔く人』が、戦争を抑止できなかったことへの痛切な反省が吐露されている。『種蒔く人』の活動は、事実として、日本の侵略戦争を止めることができず、目的を達成できなかった。

なぜ、『種蒔く人』は、戦争を止められなかったのか。『種蒔く人』の運動が頓挫した理由については、早くに青野季吉が、組織的統制の喪失・関東大震災後の経営難・同人間の思想的相違があったことを明

らかにしている。^⑥これに加え、大和田茂は「その決定的理由は（中略）関東大震災下の戒厳令にある」と述べ、社会主義運動や労働運動に対する当時の苛烈な弾圧が『種蒔く人』の運動を終わらせたのだと指摘している。

では、『種蒔く人』の運動が未完に終わったのは、雑誌終刊時の環境だけが原因だったのだろうか。別の言い方をすれば、『種蒔く人』の運動理論に瑕疵はなかったのだろうか。もしも、『種蒔く人』が無謬の理論を構築していたのなら、運動が挫折することはなかったのではないか。本稿は、このような問題意識のもとに『種蒔く人』の運動論を再検討することで、日本のプロレタリア文化運動に内在する本源的な陥穽を析出していくものである。

二 希望の光

雑誌『種蒔く人』の創刊メンバーである小牧近江が約一〇年に亘るフランスでの生活を終えて日本へ帰国したのは、一九一九年一二月であった。^⑧小牧は、帰国する直前に、フランスの作家・思想家であり、反戦・反軍国主義を標榜する国際平和運動の中心人物であったアンリ・バルビュスと面会している。バルビュスは、自身の小説『クラルテ』^⑨の名を冠したグループ・クラルテを率いて、世界中の労働者・知識人と連帯し、恒久平和を実現するための運動を実践していた。小牧は、バルビュスと握手を交わし、クラルテの運動を日本で展開することを約束して、帰国の途についてたのである。

クラルテ運動は、第一次世界大戦の渦中において、西ヨーロッパ各国の社会民主主義政党（第二インターナショナル）が民族主義に懐柔され、効果的な反戦運動を展開できなかったことへの反省から新たに立

ち上がった国際平和運動である。同時代の日本では、「グループ・クラルテ」の目的としたところは軍国主義の破壊、旧思想の否定による新思想家の世界的統一で、バルビュスは世界の思想家が統合聯絡することによって、階級打破、社会の平等化、戦争の根原たるミリタリズムの破壊等の運動を促進しやうと^⑩するものとして把握されている。それはまた、「第二インターナショナルの弱点を克服すべき志向性と、文学者による汎ヨーロッパ的ヒューマニズム運動の性格とを備えており（中略）リベラルな「思想のインターナショナル」をうたいつつも、戦後の国際共産主義運動の動向と形影相伴ってゆく^⑪」ものでもあった。

「クラルテ」の運動とは何んであるかと云ふと、簡単に云へば、思想家のインターナショナルリズムである^⑫と小牧が述べているように、グループ・クラルテと連帯する『種蒔く人』の運動において、最も重視されたのはインターナショナルリズムであった。そのことは、土崎版における第三インターナショナル（コミンテルン）の紹介に表れている。

『種蒔く人』土崎版創刊号には、小牧の筆による「恩知らずの乞食」^⑬が掲載されているが、これは第一次世界大戦時における第二インターナショナルの醜態を批判し、革命後のロシアで新たに出現した第三インターナショナルの思想が世界に拡大しつつあることを述べたものである。続く、第二号でも小牧は第三インターナショナルの議会政策を紹介し、第三号では小牧の叔父である近江谷友治による翻訳紹介記事が掲載されている。^⑭

当時、日本の労働運動に対するロシア革命の影響が限定的であった^⑮状況において、また、山川均や堺利彦たちが第三インターナショナルを否定的に認識していた時代において、『種蒔く人』がこれを肯定的に評価し、新たなインターナショナルリズムを積極的に推進しようとしたことは、特異な活動であったと言える。

第三インターナショナルと協調する『種蒔く人』の姿勢は、ロシア民衆との連帯を訴える実践活動を通して、より鮮明になる。例えば、東京で再刊された『種蒔く人』第一号の巻頭には、次のような種蒔く人の題言が掲載されている。

とうとう黙つて居れぬ時が来た。／それは資本主義や帝国主義に呪はれたロシアの民衆が、更らに自然の敵し難い災禍に魅せられ、草や木とともに涸死しやうとしてゐる。／我々はかうした運命も共産主義の破綻に起因したものだと言ふブルジョア的な考で、この問題を黙殺することが出来やうか。(中略)

とうとう黙つて居れぬ時が来た。／我々はまたしても、このまゝで、他所ごとのやうに、無産階級のために戦つてくれた人達のために、又現に戦ひつゝある人達のために、世界革命の先駆者のために、他人であらねばならぬか。

とうとう黙つて居れぬ時が来た。／誰が赤色ロシアは我々の光であると言はなかつたか。そう言つた我々の言葉はかりそめの言葉であつたか。無産者のためにパンを叫んだのも、みんなかりそめの叫びであつたか。これからさき無産者は誰れを信ずればいいのか。

とうとう黙つて居れぬ時が来た。／労働者には労働者の任務があり、農民には農民の任務があり、兵士には兵士の任務があるならば、思想の労働者たる思想家にも又思想家の任務があらねばならぬ。／思想家よ、汝の行動と汝の叫びによつて、類死せんとする同胞に、パンと医薬を与へしめよ。^⑮

革命後の混乱と内戦、各国による干渉戦争と旱魃の影響で、同時代

のロシア民衆は極度の飢饉に陥つていた。^⑮『種蒔く人』は、世界革命の先駆者であるロシアの人々を救うため、自らの使命として、救援運動を展開するのである。^⑯

雑誌は、再刊第二号においても「飢ゑたるロシアの爲めに」の特集を企画し、ロシアとの連帯を揚言する。平林初之輔「現実のロシアと架空のロシア」、加藤一夫「露西亜民衆に与ふ」、金子洋文「神様とロシア」の評論・詩が全文削除となつてゐるなか、百田宗治の詩「北天の星」^⑰は「艱難と試練の荆棘の路を」歩むロシアを「一つの新しい変光星」に喩え、世界革命を先導するその姿を表現しようとする。また、川路柳虹「飢ゑて死ぬ露西亜に」^⑱は、試練に懊悩するロシアの「おまへの悩みそのものが／世界を新にする！」と、ロシアが新たな世界秩序を作り上げることへの希望を詠い上げる。

『種蒔く人』は、その後も終刊に至るまで、ロシアと第三インターナショナルに寄り添う作品・記事を掲載し続けるが、国際的連帯の運動はそれだけに留まらない。例を挙げれば、その実践の一つとして、メーデーへの参加が挙げられる。

日本で初めてメーデーが開催されたのは一九二〇年五月二日であるが、^⑲『種蒔く人』は第三回メーデー（一九二二年五月一日）に向けて、次のような社論を掲載した。

メーデーが来た。この日は、国境によりてひきはなされ、種族によりてひきはなされてゐる万国の無産者が、これ等の区別を撤して、同じ目的のために祝ふべき祭日だ。勿論平素から僕たち無産階級の同志の目的は一つしかない。しかしそれは支配階級の銃剣によりてひき離されてゐる。この差別を撤して、万国の労働者が、その完全なインターナショナルの精神と威力とを示す唯一の日

がメーデーだ。(中略)

メーデーが来た。万国の無産者共通の唯一の祭日メーデーが来た。僕たちの目的、僕たちの進むべき道、それは一つしかない。万国の無産者団結せよ。⁽²³⁾

『種蒔く人』は、国家間の対立を解消し、「資本制度の絶滅、賃金鉄鎖よりの解放」⁽²⁴⁾を実現するために、メーデーを結節点とする無産者の世界的連帯を主張する。しかし、現実のメーデーは「労働者の示威運動といふよりも警官の示威運動に終った」⁽²⁵⁾のであった。労働者には組織がなく、戦術もなかった。さらに実行力もなく、「決議の文句はたゞ芝浦の空気を少し震動させるだけに止まった」⁽²⁶⁾のである。ゆえに、『種蒔く人』は、組織と団結の必要性をより一層、強調し、再度「万国のプロレタリア、団結せよ！」⁽²⁷⁾と檄を飛ばすのである。

『種蒔く人』は他にも、「非軍国主義号」や「赤色プロレットカルトインタナショナルの研究」⁽²⁸⁾、そして、国際婦人デーを記念する「無産婦人号」⁽²⁹⁾を刊行する一方、国内問題にも目を向け、「水平社運動」⁽³⁰⁾や「農村」⁽³¹⁾の特集号を世に送り出した。これらはいずれも、戦争の原因たる資本主義を批判し、資本に捕縛された労働者を解放するための実践であった。『種蒔く人』は、理想社会の実現のために、国内外の無産者との連繫を求め、団結の力を以て世界を改めようとしたのである。

平野謙は戦後、いち早く『種蒔く人』を評価し、本誌が「文学を中心とするもつとも広汎な反資本主義的共同戦線の機関誌」であり、「わがプロレタリア文学運動最初の指導機関誌」であったと位置づけたが、それはまた山田清三郎が把握するように「世界革命の擁護であり、プロレタリア国際主義の啓蒙・普及であり、それにともなった「批判と行動」」⁽³⁴⁾を目的とする運動体でもあった。

近代日本文学の歴史において、雑誌『種蒔く人』が展開した運動の功績は、いくら強調してもし過ぎることはない。クラルテ運動の思想をもたらし、ヨーロッパやロシアとの同時代性を日本に出現させ、知識人や文学・芸術の現実社会での存在価値を刷新した本誌の意義は、当時においては無論、創刊から百年以上を経た現在においても、褪せることなく光り輝いている。

とはいえ、『種蒔く人』の運動が完璧であったのかと問えば、そうではない。本誌の歴史的位相を認識するためには、『種蒔く人』の運動に内包された影の側面にも光を当てる必要がある。

三 国家の影

『種蒔く人』の運動論の中核たるインタナショナルイズムは、世界のプロレタリアートが団結し、戦争と資本主義に抵抗することを目的としていた。同時に、それは反国家を志向する闘争でもあった。

「非軍国主義号」⁽³⁵⁾に掲載された種蒔き社による題言「非軍国主義の論理」⁽³⁶⁾は、人類の歴史において、国家が神格化・権威化されてきたことを説き、「軍国主義とは国家主義と相はなれないものである」ことを指摘する。そして、近代の国家は資本主義と同一化することでその権威を強大にしてきたことを述べた上で、「軍国主義は全く資本主義の事である」と考える。ここから、「非軍国主義は必然的に非国家主義であり、社会主義である」との論理が導き出される。

『種蒔く人』のこうした論理は、「資本主義の破壊的作用は、人類を諸国民に分割してゐることに在るのであつて、諸国民の競争こそ、凡ての戦争の原因を蔵するものであり、一切の抑圧の口実となる」と考え、ゆえに「絶対的インタナショナルイズムを要求」するバルビュスの

思想と共鳴するものであった。⁽³⁷⁾

国家主義と軍国主義・資本主義を三位一体と捉える『種蒔く人』の反国家的立場は、次のような主張の中にも顕在化される。

僕たちは国と国との戦争には絶対に反対する。それが、いついかなる場合であらうと。何故か、国と国との戦争に参加することは、今の場合、直接に僕たちの手で禍をとにする世界の同士を殺すことだ。そして、僕たちのほんとうの敵は誰れでなければならぬか。知れ、同民族を虐使するところのものは、多くの場合、同民族である事実を。⁽³⁸⁾

右記の題言とともに『種蒔く人』は「俺は殺されることが／嫌いだから／人殺しに反対する、／従つて戦争に反対する。」と詠う武者小路実篤の詩「戦争はよくない」⁽³⁹⁾を掲載しているが、これらは戦争という事象そのもののへの抵抗であると同時に、現下の日本が今まさに遂行する戦争（シベリア出兵）に対する異議申し立てでもあった。⁽⁴⁰⁾

小森陽一は、このような『種蒔く人』の姿勢を捉えた上で、「戦時下において自らが属している国家が遂行している「戦争に反対」する運動ほど、反ナショナリズム的な運動はない」と述べ、「反戦運動は、「われわれ」と「かれら」を、味方と敵として二分化する最も凶暴なナショナリズムの意味の境界線の前線において、その対立をインターナショナルな連帯に変換する力を有している」と評価している。⁽⁴¹⁾戦争を利用してナショナリズムの高揚を図ることは為政者の常套手段であるが、シベリア出兵に際しても、例えば山県有朋は「国民をして軍国の考を起さしむるために多少の出兵をなすこと可なり」と考えていた。⁽⁴²⁾『種蒔く人』の運動は、確かに、国家権力によって発動・再生産される

同時代のナショナリズムに対峙する、反国家運動であったと捉えることができるだろう。

このように『種蒔く人』の反国家運動は、眼前の国家権力に対抗する闘争として具体化される。更に例を挙げれば、『種蒔く人』は、全国の無産者団体と同盟し、社会主義運動と労働運動、農民運動を弾圧する目的で立案された「過激社会運動取締法案」・「労働組合法案」・「小作争議調停法案」の三悪法に反対する運動を展開していた。種蒔き社がその一翼を担う無産者同盟の名で発せられた「宣言と決議」では、「ブルジョアジーの政治的権力と国家機関とによつて無産階級運動を粉砕しやうとする一点に至つては、三つの法案は全く精神を一つにする」と指摘され、中でも「過激社会運動取締法案」は「無産階級運動の最大の力の源泉たる万国の無産階級の団結と協力を、絶対に不可能にしようとするもの」として厳しく批判されている。⁽⁴³⁾『種蒔く人』は、無産階級運動を抑圧し、その連帯を阻むものとして国家を捕捉し、それへの対抗を反国家主義運動の根幹とするのである。

それでは、『種蒔く人』のインターナショナリズムは国家主義を越えられたのか。

『種蒔く人』は、敵対する国家主義を批判するが、しかし、国家主義それ自体は否定しない。なぜなら、国家は、いずれ自らが掌握するものと考えられていたからだ。村松正俊は、次のように述べている。

労働運動の最後の目的は、いふまでもなく労働階級或は無産階級が社会的及び政治的にその支配権^{マヤ}をにぎり、以つて無産階級の独裁政治を現出するのにある。この目的は、たとひいかなる反対を受けやうとも必ず達せらるべきであり、さうしてまた事実さうならないではやまないであらう。⁽⁴⁵⁾

東京で再刊した『種蒔く人』を小牧近江とともに牽引した村松は、東京版創刊号に掲載した本論文において、国家の名の下に資本が人々を支配している現状を批判し、ブルジョアジーによる専制国家に取って代わるプロレタリア独裁こそが正しく、また必然であることを強調する。

国家権力の掌握を志向する『種蒔く人』の運動論を更に鮮明にしたのは、平林初之輔である。平林は、評論「文芸運動と労働運動」において、「階級芸術の運動は、少くもその本質に於ては階級闘争の一現象、階級闘争の局部戦、階級戦線の一部面に於ける争闘でなければならぬ。従つてこれは単なる文学運動、紙上の運動としては解決の見込みがない。階級戦の主力なるブルジョアとプロレタリアの決勝によりてのみ解決されるものである」と述べた上で、「階級闘争の決勝戦はたゞ本隊の衝突によりてのみ決せられる。文芸運動はこのプロレタリア大衆の運動と協調聯絡を有しなければ全然無効である」と結論している。平林は、「プロレタリアの文芸運動は文芸運動であるよりも先づプロレタリアの運動であることを念頭にをかねばならぬ。だからその綱領は文芸上の綱領ではなくて、プロレタリアそのものの、綱領でなければならぬ。プロレタリアの解放——それがプロレタリア文芸運動の唯一の綱領である」とも述べているが、これらはプロレタリア独裁を可能とする国家権力の奪取を運動の目的として明確に設定し、その政治目的を遂行する階級闘争を扶翼するものとして、文学運動を位置づけるものである。

このように『種蒔く人』は、ブルジョアジーが支配する国家を否認するが、プロレタリアートが支配する国家は否定しない。国家を批判しながらも、国家の存在は疑わないのだ。『種蒔く人』はインターナシヨナリズムを運動理論の根幹に据えつつも、国家を自明のもの、あ

るいは所与のものとして捉えているのである。

だが、このことは矛盾ではない。なぜなら、インターナシヨナリズムとは、ナシヨナリズムを拡張するものに他ならないからだ。アンソニー・キングは一八世紀後半に現れた「インターナシヨナリズム」という言葉が近代の植民地拡大の初期段階で造語されたものであることを指摘し、それはヨーロッパの国民国家が植民地を共同統治または保護国化する意味の用語であったことを示している。⁽⁴⁷⁾即ち、インターナシヨナリズムとは、国境を融解させ対立を連帯に変換させるものではなく、特定の国家主義を正当化し普遍化するものであったということである。

以上を踏まえれば、『種蒔く人』のインターナシヨナリズムは、我々と彼等の二項対立を揚棄することができないという理論的隘路を内包していると言える。事実、村松や平林の理論に垣間見られるように、『種蒔く人』の運動論の中に、国家主義は依然として残存しており、戦争の原因たる国家そのものを批判の俎上に載せることができないのである。

そして、このことは、国家の本領たる暴力をも否定し得ないことに繋がっていく。

『種蒔く人』は、革命における暴力の是非や精神の自由の問題等を中心に議論を交わしたバルビュスとロマン・ロランの論争を全文、翻訳掲載している。⁽⁴⁸⁾革命のための暴力行使を正当化するバルビュスに対して、それを神聖視できないと批判するロランの議論について、『種蒔く人』は慎重に評価を避け、その賛否を読者の判断に委ねているが、これを翻訳した小牧近江は、次のように述べている。

グループ・クラルテをして生きたる現実の運動にするためには、

この際はつきり、世界共産主義の芸術的運動であることを宣言することだ。それ以外にない。／ロオラン、バルビュスのポレミツクを読むとき、その中に含まれてゐる字句、例へば、手段が目的より大切であると言ふことや、また、暴力を肯定するとか、せぬとか其他其他、がいろいろ僕らの良心にその一つ一つの解決を求めるが、今更僕らとして暴力を否定するやうな精神主義者にはなれぬのだから、左様な議論はわかり切つた事として通過し得るが、さて最も考へさせることは、精神の絶対自由といふことである。ロマン・ロオランによれば、芸術家は資本主義制度の治下に於て、精神の絶対自由を要求する権利があると同時に、革命治下に於てもそれと同様な権利を主張しなければならぬといふので、当面の問題たるポリシエヴィキの独裁を難じてゐる。(中略)僕らがそれをロシアとかニホンとかいふ一国の問題として考へずに、もつと広い意味の「明日」のための運動を考へる時、ひとりひとりの絶対自由の場合を無視した要求は運動の大局から見て——特に今日のやうにあらゆる方面に於て散在せる勢力を集中整頓の必要期にあつては、實際運動といふ点に今少しく立脚して考ふべきものだと思ふ。僕はロマン・ロオランの人格と彼の明快な思想には常に多大の敬意を払ふことを吝まない。しかし最高の理想といふものよりも、一日も早き実現といふものに執着する僕らとしては、思想の深刻さよりも権威よりも生きた実現の方に向つて突進したい。主義のためには多少の自由を失つてまでも——。⁴⁹⁾

小牧は、クラルテ運動がコミンテルンの芸術運動と軌を一にするべきであると考えており、革命を遂行するためには暴力の行使も厭わないう姿勢を鮮明にしている。同時に、運動を実際に進めていくに当たっ

て、人々の自由を制限することはやむを得ないとも考えているのである。国家の要諦は、「間接的または直接的に物理的暴力を用いる〔抑圧装置〕⁵⁰⁾であることだが、小牧が目指しているのはまさしく抑圧装置たる国家であり、それは『種蒔く人』が敵対する国家と同じ機制を共有しているのである。

『種蒔く人』がロシアの救援・防衛に尽力していたことはこれまでに確認した通りだが、国家主義そのものを批判の俎上に載せることができなかった本誌の運動論を敷衍するならば、『種蒔く人』のインターナシヨナリズムが目的としたのは、ロシアの国家主義——その構成要素である政治・経済・文化等——を日本へ伸張させるものであったと考へることができるだろう。これは、時代状況に制約された限界であつたとも言える。では、その限界は、『種蒔く人』の文学・芸術論と、どのように関係するのだろうか。

四 革命の芸術と芸術の革命

クラルテ運動を日本で実践し、インターナシヨナリズムを思想と行動の根幹に据えた『種蒔く人』は、社会運動を推進するだけの雑誌ではなく、文学・芸術運動を実践する文芸雑誌でもあつた。土崎版創刊号の「編輯後記」には「この雑誌は主として文学的に進み外に月一回位宛パンフレットを発行します」と記されており、東京版創刊号に付された赤バンド(帯)には「世界主義文芸雑誌」と銘打たれている。こうした言明通り、『種蒔く人』は、その活動期間中、多彩な作家・批評家の小説・詩・戯曲・評論等を掲載した。

とはいへ、『種蒔く人』に掲載された作品群に対する評価は、おしなべて低い。例えば、『種蒔く人』研究の基礎を築いた稲垣達郎は、「種

蒔く人」の多くの論文や作品についてみて気づくのは、ひとつひとつとしての価値の高いもの、意味の深いもの、少くともその時期における古典となりうるものが、わりあい乏しいことである。とりわけ、力作にぞくするものは、まったく見当らない⁽⁵³⁾と述べている。また、兩宮正衛も同様に、「種蒔く人」では、労働者をブルジョアジーに優先させると語るように、かれらの思想・行動も文学に優先していた。文学は「思想的武器にすぎな」かった(中略)「種蒔く人」は、草庵文学的な明治らしいの(現代文学)を、根底から価値転換させようとした。しかし、労働生活の写実主義を、稚拙なほどの創作力で描こうとしたばかりに、皮肉なことだが、カメラのリアリズムにかなわなかったのである⁽⁵⁴⁾と、その掲載作品の不振を批判している。

近代日本文学史上において、『種蒔く人』が画期となったのは、雑誌を象徴するような優れた作品が掲載されたことではなく、文学をプロレタリア文学運動として、換言すれば、表現活動を組織的な階級闘争の実践として把握する理論的立脚点を創り出したことにある。

このことに大きく寄与したのは、前節で確認した平林初之輔の理論であった。平林は、「階級芸術の運動は、少くもその本質に於ては階級闘争の一現象、階級闘争の局部戦、階級戦線の一部面に於ける争闘でなければならぬ」「プロレタリアの文芸運動は文芸運動であるよりも先づプロレタリアの運動であることを念頭にをかねばならぬ」と、階級闘争の一部門を担う実践形態として、文学・芸術を明確に位置づけたのである⁽⁵⁵⁾。

階級闘争の一翼を担うものとして文学・芸術を理解する新たな考え方は、次のような『種蒔く人』の社論にも反映されている。

芸術家は遂に多くありふれた芸術家であるために、そして、ま

た、それ以上に実際運動に出来得ないとの断定のもとに、新秩序の建設運動には当低大なる役割を期待することが出来ぬといふ一部の批難に対して、僕たちは何等の抗議なしに居るわけには行かない。僕らは如何に芸術家の運動が頼み甲斐のないものに見做されやうとも、之を総攻勢の一部隊として見るとき、自覚せる芸術家の動員は共同戦線といふ作戦上の見地からして、必ずしも無効なものでない⁽⁵⁶⁾と信ずるからである。

山田清三郎は、「文学運動を政治運動に結びつけたというのは、これは「種蒔く人」です。そして青野さんの役割よりも、僕は平林初之輔を高く買う。／「種蒔く人」で、平林は政治運動を本体の運動と見定め、文学運動は本体を援護する運動とハッキリ書いている。／だから青野になって政治的な方向が強まったと言うが、そうではなくて平林の築いた土台の上に立って青野が多少発展させた⁽⁵⁷⁾」と述べている。後に目的意識論⁽⁵⁸⁾を唱え、プロレタリア文学運動を社会主義意識の注入運動として理論化する青野季吉に先行して、平林の理論こそが、階級闘争と連繋するものとしてプロレタリア文学を把握することを可能にしたのであり、山田はそのことを高く評価しているのである。

しかし、このことは肯定的に評価することではない。林淑美は、青野に先行する平林の議論の重要性を指摘し、「この論(引用者注)平林初之輔「文芸運動と労働運動」は、芸術の変革の可能性を階級芸術の枠に限定し、すなわち芸術の革命という課題を放棄する端緒となったものとしてきわめて重大である⁽⁵⁹⁾」と述べている。林に拠れば、平林から青野へ至るプロレタリア文学論の展開は、階級闘争という目的に主体の意識を従属させ、目的自体を実体化することによって、意識の運動を静的なものへ固定化させてしまったという。そして、そのステイツ

クな目的が芸術の目的ともなってしまうがために、「主体の創造行為の過程にこそ諸個人の意識の変革を求め、芸術の外部からあらかじめの結果や目的を持ち込まないというアヴァンギャルド芸術の精神を徹底的に否定する」ことになったのである。

『種蒔く人』の文学論は、革命の芸術を推進し、芸術の革命を後退させる契機となったのだ。このことは、文学・芸術を目的ではなく、手段として扱う結果をもたらすだろう。例えば、『種蒔く人』同人の中で、平林と並ぶ理論家として筆を揮った青野季吉は、「プロレタリア批評家、芸術家は、芸術を宣伝の道具に使ふ。芸術の冒読者だ。そう云つて青筋を立てる。僕たちは何故、芸術を宣伝に例つていけないか、その論理がわからない。(中略)僕たちは宣伝であることを、寧ろ名譽とするのだ」と主張しており、文学・芸術を情宣の手段として把握する認識を示している。

このような文学・芸術論は、『種蒔く人』の国家論と相似的である。『種蒔く人』は、ブルジョア国家を否認しプロレタリア独裁国家を承認する論理において、国家の存在そのものを問う意識を欠落させた。一方、文学・芸術を階級闘争に附随する一部門と想定することで、文学・芸術の革新を目的とすることができず、創造主体の意識・表現の変革を運動上の課題として設定することができなかった。双方とも、国家や文学・芸術が所与のものとされ、その自明性に切り込むことができないように論理が構築されている。そのことによつて先験的な認識の枠組みが大前提とされ、国家や文学・芸術といった自己の意識が対峙・衝突するものそれ自体を意識化することができなかったのである。

後に長谷川一郎は、平林の文学理論を批判して、「氏にとつては、意識は闘争を通じて環境を把握し、従属させ、次第に自己を肥やして行

く積極的なものを意味するのでなく、反対に自己を環境の支配の下に従属させる宿命的なものを意味してゐる。従つてイデオロギイ闘争の有つ重要な役割がぬけ落ちてゐることは勿論であるが、そのみではなく、こゝから若しも我々が、創作方法論を導き出すならば、素朴な経験論的な方法しか得られないだらうといふことは明かである」と述べている。意識変革と状況変革の相互作用を理論化できなかった『種蒔く人』の運動論は、文学・芸術の停滞を招来せざるを得なかったのである。

五 クラルテの亡霊

雑誌『種蒔く人』の運動が蹉跌を来した原因は、解消すべき矛盾の本源たる国家の機制それ自体を批判し得る意識変革を理論化できなかったこと、そして、その自明性を疑う自己意識の再編成を不断に運動化する文学・芸術論を構想できなかったことにあつたと考えられる。

『種蒔く人』の運動論は、発展途上だったかも知れない。しかし、雑誌は、一九二三年の関東大震災の影響によつて休刊を余儀なくされ、一九二四年一月に、亀戸事件で虐殺された同志たちを追悼する『種蒔き雑誌』を刊行して、活動を停止することになる。その国家論と文学・芸術論を錬成する機会は、ここで失われてしまったのである。その後、『種蒔く人』の活動は、後継誌である『文芸戦線』(一九二四年六月創刊)に引き継がれることになる。だが、『種蒔く人』が抱え込まざるを得なかった陥穽もまた、継承されることとなったのである。

『種蒔く人』は、近代日本文学の歴史に多くのものを遺した。後のプロレタリア文化運動に及ぼした影響は言うまでもなく、時にはコンテュストが異なる状況において、本誌の遺産が発現することもあった。

例えば、それは戦時下である。

一九三七年七月に勃発した盧溝橋事件以降、日本は中国との戦争を本格化させ、国内も総動員体制に入ることとなる。一九三八年にはペン部隊が結成され、文学者を戦地へ派遣し、一九四〇年には文芸春秋社の企画で文芸銃後運動が実施される。⁶⁶

当時の文芸家協会は文芸銃後運動の一環として、文学者による連続講演会を企画実施するが、その中で久米正雄は「文芸的事変処理」と題する講演を行っている。久米はこの講演で、近代の戦争が国家総力戦であることを指摘した上で、「聖戦の副目的として、苦しみを通して——われわれ日本全国の同胞が、この苦しみを通して一つの苦しみを——苦しみ合ふといふ繋りを得たといふことは、聖戦の副目的として、実に偉大な時代にわれわれは住み得たといはなければならない」と、困難を乗り越えるための人々の繋がり、団結こそが戦争遂行を支える重要な力であることを強調する。そして、久米は、第一次世界大戦時に見られたその具体的参照例として、クラルテ運動を挙げるのである。

フランスの場合においてはアンリー・バルビュスと言ふ文士が立つて、クラルテ運動と云ふのを起しました。このクラルテ運動と申しますのは光明運動と訳し得ると思ふであります。この運動は……勿論フランスといふ国は御存じのやうに人民戦線の国、自由民主の国でありますから、十分このクラルテ運動も左翼的色彩をもつてをります、赤色運動的色彩をもつてをりますので、これをそのまゝ、日本の今日の国情にあてるといふことは決して出来ませんが、しかしながらこの運動の中には、たつた一つ、非常にわれわれがもつて範とすべきものが含まれてゐるんであります。それはどういふことかと申しますと、それは、あくまでもフラン

スの民族愛を基調とし、フランスの祖国愛といふものを基調としてゐたのであります。フランスの今日の時代は甚だ苦しい、非常につらいが、しかし、これはフランス民族の上に課せられた一つの試練であるからして、われわれは光明を前途に認めて耐へ忍んでゆかうではないかといふのがこの運動であつたのであります。⁶⁷

驚くべきことに、反戦平和の運動であつたはずのクラルテ運動が、戦争遂行のための運動として紹介されているのである。クラルテ運動の思想がこのように援用されることは、小牧近江も予想だにできなかったことであろう。

久米は、戦争の勝利のためには、民族愛・祖国愛を基軸とした団結の力が必要であることを強調し、フランスのクラルテ運動をその模範としている。しかし、これは久米の読み違いではない。ベルナル・シャンバスは、バルビュスが運動の結節点としてフランスで刊行していた雑誌『クラルテ』について、「平和主義がそれなりの地位を占めているにしても、クラルテを平和主義の雑誌と考えることはできない」と述べ、その理由として、「一つは、平和を防衛することが雑誌『クラルテ』の中心的課題になつていないことです。第二に、クラルテには、一定の形態の武装闘争への支持がときには現れていたからであります」と指摘している。⁶⁸ これを受けて西川長夫は、「フランスの平和主義は、これは一種のナシヨナリズムであつて、それは容易に戦争主義にも通じるようなものである」と述べている。クラルテ運動には、戦争と国家主義とに通じる回路が予め備わっていたのである。

『種蒔く人』の活動が休止した後、平林初之輔は、愛国心という言葉が免罪符となつて政治や社会に混乱が生じていることを憂慮し、次のように述べた。

この「愛国心」の発露も旗泥棒くらいの火災^{はや}ですむ間はよい。いつかはこれが燎原の火となつて、遂には日本の国交を危殆に陥れるやうなことになるかどうか。軽挙盲動の後に何等かの成算があるか私はかくの如き人類世間の不祥事がきまぐれな無責任な一部の愛国心専売屋からかもし出される危険の可能性を感じ且つおそれる。当局と与論の指導者たる操觚者とは今に於て十分の注意を要する。そして先づ「愛国心」の呪文からさめ、「愛国心」といふ三字の前に理性を失ふやうな迷蒙から脱しなければならぬ⁽⁷⁰⁾。

平林の危惧がその後、現実のものとなったことは、久米の発言によっても明らかであろう。

『種蒔く人』の一連の活動、その興隆と挫折が指し示すのは、戦争を止めるためにはまず何よりも、国家への盲信から脱し、国家主義^{ナショナリズム}そのものへ批判の眼を向けなければならないということであった。そして、文学・芸術を、合目的な手段ではなく、自己意識の脱構築を実践する持続的運動とすることであった。それは、インターナショナルイズムでは超克できない困難な課題であり、現在においてもなお解決されない近代のアポリアであり続けている。『種蒔く人』が蒔いた種は、未だ実を結んでいないのである。

注

(1) 雑誌『種蒔く人』は、一九二二年二月から四月にかけて全三冊を刊行（いわゆる土崎版）して一時休刊する。その後、一九二二年一〇月から一九二三年八月までの間に全二〇冊を刊行した。これに加え、一九二四年一月に『種蒔

き雑誌』を発行し、他にも『帝都震災号外』（一九二三年一〇月）を始め、複数の号外やリーフレットを発行している。書誌情報の詳細は、小田切進「解説」（『種蒔く人』復刻版別冊解説）日本近代文学研究所、一九六一年、八一―一二頁）を参照。

(2) 佐々木孝丸「アンリ・バルビュスに就て」（『文学評論』ナウカ社、二二一）、一九三五年一〇月、一八八頁。

(3) 小牧近江「世界パンフレット通信（二二三）アンリ・バルビュスの芸術と思想」（世界思潮研究会、一九三二年、二五頁）。

(4) 『種蒔く人』に関する先行研究は、天雲成津子「『種蒔く人』関係文献目録」（『種蒔く人』顕彰会編『種蒔く人』の射程——一〇〇年の時空を超えて——）秋田魁新報社、二〇二二年、二九六―三二二頁）にまとめられている。ほぼ全ての先行論は雑誌『種蒔く人』の歴史的意義を闡明し、その功績を顕彰する観点から立論されている。これに対して、『種蒔く人』の運動そのものの限界を指摘し、その理論的隘路を批判する研究は殆どない。批判的立場から検証された例外的な先行論としては、『種蒔く人』における文学論の不十分さを厳しく指摘した、野淵敏・雨宮正衛「『種蒔く人』の形成と問題性」（『秋田文学』、一九六七年）がある。本稿は、野淵・雨宮の成果を踏まえ、文学論のみならず、文学を含み込んだ運動理論を批判的に検討するものである。

(5) 小牧近江「クラルテ運動の今日」（『東京民報』東京民報社、（九九五）、一九四八年九月九日、二頁）。

(6) 青野季吉「文芸戦線」以前（『種蒔き社』解散前後）（『文芸戦線』文芸戦線社、一（一）、一九二四年六月、五―七頁）を参照。

(7) 大和田茂「『種蒔く人』の消滅点」（『彷彿月刊』弘隆社、一四（一一）、一九九八年一〇月、二〇頁）。

(8) 小牧近江のフランスでの活動を含め、雑誌『種蒔く人』の全体像を研究した成果として、北条常久「『種蒔く人』研究―秋田の同人を中心として―」（桜楓社、一九九二年）および同「『種蒔く人』小牧近江の青春」（筑摩書房、一九九五年）がある。同時代状況に関する本稿の記述は、北条の研究成果に多くを負っている。

(9) Henri Barbusse, *Clarité*, Paris: E. Flammarion, 1919. 邦訳は、アンリ・バルビュス著、小牧近江・佐々木孝丸共訳『クラルテ』（叢文閣、一九二三年）。

(10) 宮島新三郎・相田隆太郎「改造思想十二講」（新潮社、一九二二年、四五―五三頁）。

(11) 山口俊章「国際プロレタリア文学運動とフランス―クラルテ運動からハリコフ会議まで―」（『外国学研究』神戸市外国語大学研究所、（五）、一九七七

- 年三月、七五一六頁)。フランスにおけるクラルテ運動については、山口俊章「クラルテ運動」(『近代』神戸大学「近代」発行会、(四七)、一九七三年七月、一一二二頁)、同「戦間期ヨーロッパにおける国際的文学・思想運動」(『関東学院大学文学部紀要』関東学院大学文学部人文学会、(一一一)、二〇〇七年二月、一一二四頁)も参照。
- (12) 小牧近江「クラルテ」の運動と日本の思想家」(『我等』我等社、三(八)、一九二一年八月、五〇頁)。
- (13) 小牧近江「恩知らずの乞食」(『種蒔く人』種蒔き社、一(二)、一九二二年二月、八一—一〇頁)。
- (14) 小牧近江「第三インターナショナルと議政略」(『種蒔く人』種蒔き社、一(二)、一九二一年三月、二一五)、金中生(近江谷友治)「第三インターナショナルへの闘争」(『種蒔く人』種蒔き社、一(三)、一九二一年四月、二一六)を参照。小牧は、『種蒔く人』以外にも、積極的に第三インターナショナルを紹介している。小牧近江「第三インターナショナルの歴史的研究」(『解放』解放社、三(五)、一九二一年五月、二一—三四頁)、同「第二インターナショナルの死産」(『太陽』博文館、二七(一四)、一九二二年二月、一〇七—一三頁)を参照。
- (15) 山辺健太郎・竹村英輔「十月革命が日本にあたえた影響」(『前衛』日本共産党中央委員会、(二三五)、一九五七年二月、一二四—四八頁)、および渡部徹「ロシア革命と日本労働運動——『露西亜革命の感想』をめぐって——」(『現代の理論』現代の理論社、四(一〇)、一九六七年一〇月、二一—三三頁)を参照。渡部はここで、一九一〇年代後半の日本の労働運動に対する「ロシア革命の直接の影響は認められない」(二二頁)と述べている。
- (16) 山川均「第三インターナショナル」(『改造』改造社、三(五)、一九二一年五月、七七—八四頁)、堺利彦「日本に關係なし」(同前、九四—八頁)を参照。山川・堺の批評が掲載された『改造』当該号は「第三インターナショナル批判」を特集し、他にも賀川豊彦「独裁主義の無能—第三インターナショナルの欠陥—」(八四—六頁)や土田杏村「少数者暴力の価値」(九九—一〇二頁)などが掲載されている。
- (17) 「思想家に訴ふ」(『種蒔く人』種蒔き社、一(二)、一九二一年一〇月、一頁)。
- (18) 森戸辰男『ロシア大飢饉と其救済運動』(大原社会問題研究所出版部、一九二二年)を参照。森戸は本書で、「労働者と農民の政府であるソヴィエツト政府は、勿論全勢力を挙げて此の災禍と闘ひ、その損害の軽減に努めた」(四三頁)と述べている。それが誤認であったことは、梶川伸一「飢饉の革命—ロシア十月革命と農民—」(名古屋大学出版会、一九九七年)が明らかにしている。
- (19) 「種蒔く人」は、リーフレット『飛びゆく種子』(種蒔き社、(四)、一九二二年八月)に、ノルウェー出身の探検家で国際連盟難民高等弁務官を務め、一九二二年にノーベル平和賞を受賞したフリチョフ・ナンセンの講演録「露国飢饉の実情とその救済——各国民の最大急務は、現下の飢饉たる露西亜を救ふに在り——」(二—一四頁)を掲載する一方、誌面で何度もロシア救済のための募金を呼びかけるなど、積極的・継続的にロシアへの支援運動を展開した。
- (20) 百田宗治「北天の星」(『種蒔く人』種蒔き社、一(二)、一九二二年一月、六五頁)。
- (21) 川路柳虹「飢えて死ぬ露西亜に」(『種蒔く人』種蒔き社、一(二)、一九二二年一月、七二—三頁)。
- (22) 大原社会問題研究所『日本労働年鑑 大正十年版』(大原社会問題研究所出版部、一九二一年、三〇頁)を参照。メーデーにおいて、初めて示威行進が実施されたのは、一九二一年五月一日の第二回からである。小牧近江は村松正俊らとともに、第二回メーデーに参加し、芝浦から上野までのデモに加わっていた。そこで警官と殴り合い絶叫している佐々木孝丸を発見した小牧は、『種蒔く人』のメンバーに佐々木を誘うことになる。街頭での実践を重視した『種蒔く人』の行動は、小牧近江「ある現代史——種蒔く人 前後——」(法政大学出版局、一九六五年)、佐々木孝丸『風雪新劇志——わが半生の記——』(現代社、一九五九年)に詳しい。
- (23) 「メーデーと無産階級」(『種蒔く人』種蒔き社、二(八)、一九二二年五月、三七—八〇頁)。
- (24) 同前(三八〇頁)。
- (25) 「メーデーの教訓」(『種蒔く人』種蒔き社、二(九)、一九二二年六月、四六—三頁)。
- (26) 同前。
- (27) 同前。
- (28) 「種蒔く人」(種蒔き社、一(三)、一九二二年二月)。なお、『種蒔く人』(種蒔き社、五(一)、一九二三年七月)でも「反軍国主義」が特集されている。
- (29) 「種蒔く人」(種蒔き社、三(二二)、一九二二年九月)。
- (30) 「種蒔く人」(種蒔き社、四(二七)、一九二三年三月)。
- (31) 「種蒔く人」(種蒔き社、四(二六)、一九二三年二月)。

- (32) 『種蒔く人』(種蒔き社、五(二)、一九二三年八月)。
- (33) 平野謙「第四階級の文学」の時代」(『文学』岩波書店、一八(二)、一九五〇年一月、二二二頁)。
- (34) 山田清三郎『プロレタリア文学史上』(理論社、一九五四年、二七一頁)。「種蒔く人」のインタナショナルイズムが具現化した例として、本誌に触発されて朝鮮プロレタリア芸術連盟を設立するに至った金基鎮の活動も挙げられるだろう。金基鎮に関しては、李修京『近代韓国の知識人と国際平和運動』金基鎮、小牧近江、そしてアンリ・バルビュス(明石書店、二〇〇三年)が詳細に検討している。
- (35) 注28に同じ。
- (36) 「非軍国主義の論理」(『種蒔く人』種蒔き社、一(三)、一九二二年二月、二二四―七七)。
- (37) アンリ・バルビュス著、青野季吉訳「吾々の為す可きこと」(バルビュス著、青野季吉訳『バルビュス論抄』(田中王堂・土田杏村編輯『海外芸術評論叢書第四編』)聚芳閣、一九二六年、二二二頁)を参照。
- (38) 「アンチミリスートの立場」(『種蒔く人』種蒔き社、一(三)、一九二二年二月、二二三頁)。
- (39) 武者小路実篤「戦争はよくない」(『種蒔く人』種蒔き社、一(三)、一九二二年二月、二二八―九頁)。
- (40) 種蒔き社は、前衛社や無産階級社などとともに、対露非干渉同盟に参加している。社論「世界平和、人類愛、撤兵と飢饉」(『種蒔く人』種蒔き社、三(二〇・二一)、一九二二年八月、二一三頁)および、山田清三郎「文化運動史第二編 プロレタリア文化運動史」(『日本資本主義発達史講座 第三回配本』岩波書店、一九三二年、二九―五三頁)を参照。
- (41) 小森陽一「〔総説〕マルクシズムとナショナルイズム」(『岩波講座 近代日本の文化史5 編成されるナショナルイズム』岩波書店、二〇〇二年、一一二頁)。
- (42) 原奎一郎編『原敬日記第四巻 総裁就任』(福村出版、二〇〇〇年、三七六頁)。一九一八年三月三〇日に山県有朋と面会した原敬が書き留めたもの。
- (43) 一九二二年の第四五回帝國議會に上程された「過激社会運動取締法案」に対して、『種蒔く人』は、社論「反動政府へ抗議す」(『種蒔く人』種蒔き社、二(七)、一九二二年四月、二八八―九〇頁)、種蒔き社「世界の青年に訴ふ」(同前、三四四頁)で反対声明を出している。一九二三年の第四六回帝國議會に際して展開された反対運動の詳細は、松尾尊允「第三章 一九二三年の三悪法反対運動」(渡部徹・飛鳥井雅道編『日本社会主義運動史論』三一書房、一九七三年、九九―一二六頁)を参照。

- (44) 無産者同盟「宣言と決議」(『種蒔く人』種蒔き社、四(一七)、一九二三年三月、二二〇―二二頁)。
- (45) 村松正俊「労働運動と智識階級」(『種蒔く人』種蒔き社、一(二)、一九二一年一〇月、一〇頁)。
- (46) 平林初之輔「文芸運動と労働運動」(『種蒔く人』種蒔き社、二(九)、一九二二年六月、四六七―九頁)。
- (47) Anthony D. King, *Urbanism, Colonialism, and the World-Economy: Cultural and Spatial Foundations of the World Urban System*. London: Routledge, 1990, p.78.
- (48) 「ロマン・ロオラン対アンリ・バルビュスの論争(五通全訳)」(『種蒔く人』種蒔き社、三(一〇・一一)、一九二二年八月、五一―三六頁)。
- (49) 小牧近江「問題のクラルテ運動と日本に於ける僕等の立場」(『読売新聞』読売新聞社、(二六二四三)、一九二二年六月八日朝刊、七頁)。小牧が暴力革命を念頭においていたことは、金子洋文が証言している。座談会「プロレタリア文学運動史」土崎版「種蒔く人」について(『社会主義文学』社会主義文学クラブ、(二二)、一九六〇年六月、二八頁)を参照。
- (50) ルイ・アルチュセール著、西川長夫・伊吹浩一・大中一彌・今野晃・山家歩訳「再生産について―イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置」(平凡社、二〇〇五年、二二六頁)。
- (51) 「編輯後記」(『種蒔く人』種蒔き社、一(二)、一九二二年二月、一八頁)。
- (52) 「帯コピー(赤バンド内に記載)」(『種蒔く人』種蒔き社、一(二)、一九二二年一〇月に添付)。
- (53) 稲垣達郎「再刊「種蒔く人」細目(未定稿)」(『人文科学研究』早稲田大学人文科学研究所、(一一)、一九五二年五月、七六頁)。
- (54) 雨宮正衛Ⅱ「文学的検討」(野淵敏・雨宮正衛『種蒔く人』の形成と問題性』前掲、四四―四九頁)。同書に掲載されたインタビュの中で、小牧近江は、「文芸は重視していない。はじめに政治ありきだ」(二二頁)と述べている。また、座談会「プロレタリア文学運動史」土崎版「種蒔く人」について(『前掲』)では、「洋文、賢三両君の前で、まことにぎんきにたえないが、すでに腹の中では政治運動の雑誌にしていたかつたという事です。再刊「種蒔く人」になつてからも、文芸と政治論争が起るところだつたのですが、そういう意図があつたということは隠すわけにはいかない」(二八頁)と告白している。雑誌において文学がおおざりにされた背景には、このような政治優先の編集方針も関係していると考えられる。
- (55) 平林初之輔「文芸運動と労働運動」(前掲、四六七―八頁)。

- (56) 「芸術運動に於ける共同戦線」(『種蒔く人』種蒔き社、二(九)、一九二二年六月、四六四―五頁)。
- (57) 座談会「種蒔く人の終刊まで 社会主義文学史共同研究(三)」(『社会主義文学』社会主義文学クラブ、(二四)、一九六二年五月、五七頁)。
- (58) 青野季吉「自然生長と目的意識」(『文芸戦線』文芸戦線社、三(九)、一九二六年九月、三一五頁)、同「自然生長と目的意識再論」(『文芸戦線』文芸戦線社、四(二)、一九二七年一月、一〇二―五頁)を参照。
- (59) 林淑美「文学と社会運動」(『岩波講座 日本文学史 第13巻 20世紀の文学2』岩波書店、一九九六年、一一七頁)。
- (60) 同前(一一九頁)。林淑美は本論文において、青野季吉がマルクス主義思想の「階級意識」という用語に「目的意識」という意識とも言える訳語を充てたことが、近代社会における自己意識の問題化を阻み、その後のプロレタリア文化運動を硬直化させたという重要な指摘を行っている。
- (61) 青野季吉「階級闘争と芸術運動」(『種蒔く人』種蒔き社、四(一六)、一九二三年二月、一二二頁)。「宣伝に例つて」は、「宣伝に使つて」の誤植である。誤植の修正は、『日本プロレタリア文学評論集・3 平林初之輔・青野季吉集』(新日本出版社、一九九〇年、二〇三頁)を参照。
- (62) 長谷川一郎「芸術の方法——蔵原惟人氏の創作方法論の批判——」(『唯物論研究』唯物論研究会、(三七)、一九三五年十一月、九三頁)。
- (63) 『種蒔き雑誌』(種蒔き社、一九二四年一月)。
- (64) 『文芸戦線』以降のプロレタリア文化運動に関しては、拙稿「プロレタリア文化運動における組織の問題」(中川成美・村田裕和編『革命芸術プロレタリア文化運動』森話社、二〇一九年、七三―九二頁)、および『国民文学のストラテジー——プロレタリア文学運動批判の理路と隘路』(双文社出版、二〇一四年)を参照されたい。
- (65) ペン部隊に関しては、白井喬二『従軍作家より国民へ捧ぐ』(平凡社、一九三八年)を参照。文芸戦後運動に関しては、文芸家協会編『文芸年鑑二六〇〇年版』(第一書房、一九四〇年)、『文芸春秋三十五年史稿』(文芸春秋新社、一九五九年)を参照。
- (66) 久米正雄「文芸的事変処理」(今日出海編『文芸戦後運動講演集』文芸家協会、一九四一年、一三八―九頁)。
- (67) 同前(一三五頁)。長谷川泉は、この久米の講演内容について、「種蒔く人」の頃とも違った視点からの思い切った発言である」と述べている。長谷川泉「文壇30の謎」(『国文学』解釈と教材の研究)『学燈社、二二(一一)、一九七八年九月、一五九頁)を参照。
- (68) ベルナル・シャンバス「雑誌『クラルテ』と平和主義」(安斎育郎・李修京編『クラルテ運動と『種蒔く人』——反戦文学運動『クラルテ』の日本と朝鮮での展開』御茶の水書房、二〇〇〇年、二五頁)。
- (69) 西川長夫他【第三部】クラルテ運動の朝鮮での展開と金基鎮／《総合討論》(安斎育郎・李修京編『クラルテ運動と『種蒔く人』——反戦文学運動『クラルテ』の日本と朝鮮での展開』同前、一六一―二頁)。
- (70) 平林初之輔「愛国心の濫用を戒む」(『文芸戦線』文芸戦線社、一(三)、一九二四年八月、一一頁)。

附記

本文や資料の引用に際し、漢字は新字に改め、ルビ・傍点等は一部を除いて省略した。引用文中の「／」は原文での改行を示す。

本研究はJSPS 科研費 JPSJK03888 の助成を受けたものである。

(本学文学部教授)